

麻生太郎でございます。

親愛なる同僚議員の皆さん、自由民主党党員、党友の皆さん。
皆さんを通じ、わたくしは敬愛する、日本国国民の皆さんに申し上げます。
そして世界の皆様に、わたくしはおのれの信ずるところを訴えます。

わたしが愛する日本は、いま、この瞬間、立ちすくんでおります。
本来歩みを止めるべきでないときに、急停止を余儀なくされております。

このことを思うにつけ、わたくしは断腸の思いに駆られます。
責任を果たそうとして、果たせずにおりますこの1週間、
またこの先の、1週間。
政治の空白に、痛切な責任を感じます。国民の皆様に、心からお詫びを申し上げる次第です。

だからこそ、この総裁選挙に課された期待と、責任は、ことのほか大きい、
そう思わないではられません。

自由民主党が本当に変わったのか。国民は見ております。
開かれた国民政党として、その名に恥じない政党になったのか。
国民は、瞳を凝らしております。
本総裁選挙の意義は、まずもって、その点にこそあろうと存じます。
後世、歴史家がふりかえるとき、古い自民党と、小泉改革以来の、新しい自民
党との再試合だったと、そう記述するでありましょう。
どんな結末をもたらすのか。われわれに課せられた責務は重大であろうと存じ
ます。
わたしどもすべて、国民の目を強く意識し、政策をもって白黒をつける戦いを、
堂々と戦わねばならぬと存じます。

わたくしは、皆様の前に、政策の選択肢をお見せします。
わたくしが信じる、日本人の能力を語ろうと思えます。
指導者に求められる、資質を申し上げます。
そのうえで、何を選ぶのか。
公平無私の見方、国益を忘れぬ目をもって、選んでいただきたい、このように
思います。

急ごしらえでつくった合意は、簡単に崩れます。
あわててまとめた多数派は、成立のその瞬間、瓦解へ向けて動き出します。

我が自由民主党は、既にそのことを、過去の歴史から学んだはずでありました。我が党は長い歴史において、ある結論に達しておりました。それは、指導者を選ぶとき、国民に広く、候補者と政策の選択肢をお見せし、国民の声を聞きながら選ぶのでなければならないという、そのことであります。

皆さん、

いまほど日本が、危機に臨んで動じない、「強い」指導者を必要としているときは、ありません。

「安定した」指導者では、ありません。「強くて、頼りになる」指導者をこそ、必要としております。

また、いまほど日本の農山村、漁村、地域の経済が、たった二文字を求め、渴望しているときは、ありません。

その二文字とは、「希望」であります。

皆さん、

朝（あした）に希望をもって目覚め、昼は懸命に働き、夜は、感謝とともに床につく。

人間の営みとは、もしこの三つが十分にできるなら、幸せなのだと思えます。

わたくしは、日本の若者に希望を与えたい。

農山村、漁村のおじいちゃん、おばあちゃんに、この先、そんなに悪くはなりませんよ、

きっといいことがありますよという、希望を感じてもらいたい。

わたくしは、毎晩、感謝の思いとともに眠りに就けるよう、粉骨砕身、この身を捧げて参る所存です。

またいまくらい、日本の発する言葉が重みを増しているときも、ないのであります。

日本の発する言葉とは、煎じ詰めたところ、総理の発する言葉であります。

世界がそれに、耳を傾けます。

日本の環境を守り、治山治水に精を出しておられるお父さん、

お弁当をつくって子供を送り出し、それから自分も働きに出るお母さん、

あるいはまた、ネットカフェ難民と呼ばれ、あしたの暮らしを心配する若者にも、総理は呼びかけなくてはならぬのだと思えます。

わたくしは、「強い」言葉を発する総理になりたいと思えます。

我が国の進むべき道はこうだと、明確な言葉を語れる総理になりたいと思えます。

日本というのは素晴らしい国だ、頼りになる仲間だ、そして、尊敬すべき国だと、諸外国の指導者に、また国民に思ってもらえることのできる、そういう言葉を発することのできる、総理大臣になりたいと、考えております。

総理に選ばれましたあかつきには、日本をどんなふうに変えたいのか。申し上げます。

日本と日本人の底力に、わたしは揺るぎない信頼を置いております。

その底力を、存分に解放すること。

それによって、力強い成長の軌道に、いまいちど我が国を乗せることであります。

地方経済に、息を吹き返させることであります。

実力解放、自力成長、であります。

これから具体的な例を、内政について三つ、それから外交について三つ、申し上げます。

始めは内政についてであります。

第一は、将来不安の払拭。これは目下の状況で、まずは年金の話だと存じます。

第二に、徹底的な機会の平等。不当な格差は、断固つぶすということです。

第三に、経営者の目をもって、新たな成長戦略を力強く推し進める、ということでもあります。

順に、ご説明いたします。

まずは年金であります。

支払い漏れが一人もないよう、徹底を期します。

そのため、すべての国民の皆様にも、年金が確認できる葉書をお送りします。

社会保険庁、自治体窓口で保険料を横領した不逞の輩の行いは、金額の多寡を問わず、言語道断の所業であります。

なぜなら、これは制度に寄せる国民の信頼を根底から掘り崩し、ひいては政治それ自体に対する不信を助長するからに、ほかなりません。

わたくしは、年金が国民の未来を託すにたる、信頼の置ける制度に生まれ変わるよう、政権の命を賭けて取り組んで参ります。

加えて、年金問題の本当の核心は、今日ただいま35歳の青年が、65歳になったとき、安心して暮らせるか。

そこに、見通しをつけさせてやることにあろうと存じます。

まずは現行制度に不公平をなくし、次に年金制度の将来設計を考え直す。
このことに、総力をつぎ込む所存です。

第二は、機会の平等です。

40歳とか、50歳になれば、人間、自分の顔に責任を持って、といいます。

危機に及んでどっしり落ち着き、ほほえみを絶やさぬ顔。

わたくしは、こういう顔を国民の皆様に、お見せすることも指導者の使命であろうと信じます。

人間とは、目の前の選択肢の中から、ひとつひとつ選んでいき、ついには顔をも自分でつくるわけであります。

ところが、おぎゃあと生まれたその場所が、日本のどこであるか。

生んでくれた両親が、どんな両親であるか。

自分で選ぶことはできません。

したがって、政府が心がけるべき最も大事なことは、機会の平等を徹底して
図るということであります。

そこから、格差の是正という、緊急の政策課題が出て参ります。

中でも、農山村、漁村といった、地方。

企業でいえば、中小零細企業。

ここに、いまの日本では、強い影が落ちております。

農山村、漁村に生まれつき、中小零細企業に働く両親のもとに生を受けた子供
が、ただそのことだけで将来に豊かな展望をもてない……

そんなことになれば、日本は日本でなくなります。

方法はあります。

例えば、地方交付税のあり方を大幅に変えることが、その一つと存じます。

補助金にしても、地方が自分の工夫を活かして使えるようにしてやることです。

総務大臣として、わたくしは、国から地方へ3兆円の税源移譲という大改革を
手がけました。全省庁が反対でした。

地方にできることは地方にという、構造改革をさらに進めます。

危機に追い込まれたとき、人間は二つの反応をとるであろうと思います。

助けてくれ—と言って、人を当てにする。

なにくそと言って、自分で活路を開く。

中央と地方の関係が今のままですと、地方に「なにくそ」という気持ちになかなか起きません。

例を挙げます。

能登半島の加賀屋。老舗の旅館です。

交通の便が悪く、だんだんと客足が遠のいておりました。

しかし、仲居さんに英語や中国語を勉強させ、台北や香港からのお客さんを増やして伸びました。

このあいだ、地震の被害に遭われましたが、評判はいささかも衰えておりません。

それから北海道の、旭川にある、旭山動物園。わたしも行きました。今では日本一有名な動物園です。

あれも、なにくそと言って、活路を開いた一例です。

企業や、団体には、こういうことがいくらでもできる。

自治体にも、これはできるというふうにはせねばならぬのであります。

別の例を挙げます。

半導体は、シリコンの板に、回路を書きます。

普通、回路は平面に並べます。

しかし一定面積の板に、回路を平面に並べる微細な技術は、もう限界に来ております。

それなら回路を、垂直に重ねて書いていけば、限界を突破できるじゃないか。

実はこれ、世界最先端の技術ですが、日本人の科学者が思いついた独創です。

圧倒的競争力をもつこんな技術で、我が国がいまいちど、半導体産業の先頭に立つ。

そんなことも、不可能ではありません。

申し上げます。日本の底力には、「とてつもない」ものがあるのだと、そう存じます。

そしてそういう技術をもった工場を、地方が誘致してはどうでしょうか。

観光産業なら、お客さんを広くアジアに求めるとか、

エコツーリズムの客を、思いきってオーストラリアやニュージーランドに求めるとか、

自治体には頭さえ絞れば、そして、それを許す財政的裏付けと人材さえあれば、できることがいろいろとある。

わたくしの都市・地方間格差是正政策の根本には、市町村長が、地域経営者としての発想をもって、動きやすくする、

そういう背骨が通っております。

申し上げますが、こういう話は霞が関からは、出てきません。
総理総裁に求められる力とは、霞が関に信頼されつつ、
違うアイデア、違う発想を、彼らには到底思いつけない突破口を、示してやる
ことです。

それに必要な総裁の能力とは、あらゆる人に、この人と話したい、聞いてもら
いたい、アイデアを教えたい、そう思ってもらえることです。

そして第三は、経営者の目をもって、新たな成長戦略を力強く推し進めるとい
うことであります。

成長促進、といいますと、予算をくれ、という。

これが、お役人の発想。

何か新しい商売を探したり、仕入れの仕方を変えて原価をぐっと下げたり、
これが経営者の発想です。

我が党の、政調会長をさせていただいたときでありました。

港の通関やら、建築申請やら、そのたびに役所に紙を提出しろという法律が、
数えてみたら5万2100本もありました。

それを、たった一本新しい法律を作り、1回で、それもオンラインで、手続き
が済むようにしました。

すさまじい抵抗はありましたが、構造改革とは、こういうことをやるのであり
ます。

日本経済のコストを、思い切って下げてやる。

それで、利幅が増えれば、株の配当も、働く人の給料も、ともに上がる。

こういうやり方は、いくらでもあります。

ただし、役所の縦割りを残しては、何もできません。

強い政治指導者がいて、初めて可能なのであろうと存じます。

外交に、話を移します。

三つ申し上げたいのは、第一に、インド洋の給油活動。

第二に、いま日本の外交が歴史的転機にあるということ。

第三が、拉致問題の解決です。

インド洋の活動は、日本が国益をかけ、自分のためにやっていることです。

6年前の9月11日、日本人も24人犠牲になったことをわれわれは忘れては
なりません。

インド洋は、日本に油を送る、シーレーンの出発点でもあります。
ここをテロリストの勝手気ままにさせてはならぬ。
日本の国益とは、その一点に集中します。
これを、アメリカのためなどと言うのは、事実誤認も甚だしい。

ヨーロッパの国々が、日本を見直したのは、この給油活動です。
それからイラクに行って、盗みの一つ、軽犯罪の一つも犯さず、見事な規律を示したわが自衛隊の諸君を見て、イギリスやオランダは驚きました。

みなさん、我が国のGDPは世界の10%を占めます。中国、韓国、ロシアを足したより、まだでかいですから。
それにふさわしい貢献を、日本は立派にやっている。
こう、彼らが心の底から得心した。
それでいま、我が国の外交は、大きく地平を広げました。これが、第二の点です。
欧州諸国と一緒にになり、東欧諸国、バルカン諸国で、自由と、繁栄を伸ばしていく。
こういう政策ができるようになった。
安倍総理は、インドの国会でこれを「自由と繁栄の弧」をつくる政策だと紹介されました。
アメリカと、オーストラリアと、一緒になって、アジアや太平洋の安全にもっと責任をもっていこう、という政策につながった。
それらの根も、元をただと、インド洋の活動にあったのであります。
これだけのスケールをもつ活動なのだということを、誰かが国民に語り続けていかねばなりません。わたくしは、やってまいる所存です。
日米同盟の強化は、こういういろんなルートから、もっとできるようになります。

第三は、拉致問題の解決であります。
わたしは、新潟の海岸に足を運びました。
横田めぐみさんが連れ去られた、その場所に行きました。
にぶく曇る、日本海を見ました。涙がにじみました。

断固、あきらめません。わたくしは日本国の主権をかけ、国民の生命を守るといふ、国家にとって最も重要な任務の遂行（すいこう）のため、北朝鮮に解決を迫ります。

最後に申し上げます。

談合とは、申しません。しかし「思惑（おもわく）による連合」、「思惑連合」によって、日本のリーダーを決めてしまう。

そんなことがあつては、日本民主政治の汚券に関わります。

幕が開（あ）いたと思ったら、芝居は終わっていた。古い自民党に戻った。

それでは、自民党も終わります。

国民の皆様は、自民党は、確かに変わった。

そう分かっていただけの、総裁選挙の完遂（かんすい）をめざし、やり抜きます。

わたくしは、パレスチナの若者が、日本を待っているのを知っております。

ホンジュラスの子供達が、青年海外協力隊がこしらえた教科書で、算数を学び、学校が好きになったことを知っております。

カンボジアの民法をつくっているのが、まだうら若い、日本の女性であることを知っています。

日本は、わたしたちが誇りとする国家です。まさに、「とてつもない日本」なのです。

わたくしの愛し、誇りとしてやまぬ日本を、日本人一人ひとりが誇りとし、未来に希望を、活力を求めることができる国になるよう、命を賭けて参ります。

全国の党员、党友、ならびに国会議員諸先生の深いご理解をお願い申し上げ、麻生太郎の所見の表明といたします。